

Economic Indicators

発表日:2018年10月9日(火)

国際収支(2018年8月)

～貿易収支の悪化により経常収支(季調値)は前月から黒字幅を縮小～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部

エコノミスト 伊藤 佑隼 (TEL:03-5221-4524)

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			第一次所得収支	
					貿易・サービス収支			
					貿易収支	サービス収支		
2017	5月	16,932	15,896	1,586	3,205	▲ 1,620	15,973	
	6月	9,252	15,544	1,453	2,092	▲ 638	15,982	
	7月	23,471	18,649	4,062	5,136	▲ 1,074	16,469	
	8月	24,007	21,030	5,146	5,749	▲ 603	17,979	
	9月	22,583	18,377	3,993	4,898	▲ 905	16,367	
	10月	21,885	22,961	7,286	5,352	1,934	17,467	
	11月	13,407	18,652	4,036	4,824	▲ 788	16,605	
	12月	7,965	17,335	2,545	2,730	▲ 185	17,063	
	2018	1月	5,924	18,627	4,424	5,257	▲ 832	15,740
		2月	21,082	9,933	▲ 2,845	▲ 2,819	▲ 25	14,686
		3月	31,816	18,276	3,555	4,861	▲ 1,306	16,352
		4月	18,913	19,381	5,704	6,544	▲ 840	15,087
5月		18,873	17,931	▲ 1,481	656	▲ 2,137	21,010	
6月		11,989	17,841	829	2,473	▲ 1,644	18,995	
7月		20,097	14,847	824	1,578	▲ 753	16,070	
8月		18,384	14,288	▲ 591	342	▲ 933	17,090	

(出所)財務省「国際収支統計」

○貿易収支の黒字幅縮小が経常収支の押し下げ要因に

8月の経常収支(原数値)は18,384億円の黒字(コンセンサス:18,966億円の黒字、レンジ:13,410~23,226億円)とコンセンサスを下回る結果となった。季節調整値では14,288億円の黒字となり、前月(7月:14,847億円)から黒字幅が縮小した。

経常収支(季節調整値)を項目別にみると、押し下げ要因となったのは貿易収支の黒字幅縮小だ。年明け以降、原油価格の上昇を受けて輸入が堅調に推移する中で、貿易収支は黒字幅縮小傾向で推移している。貿易収支が経常黒字の縮小要因となる一方で、世界経済の改善を受けて高水準で推移する所得収支が下支えとなる構図が続いている。

○直接投資、証券投資ともに黒字幅拡大

8月の貿易外収支(季節調整値)をみると、第一次所得収支は17,090億円の黒字と前月(7月:16,070億円の黒字)から黒字幅が拡大した。直接投資(7月:8250億円の黒字→8月:8765億円の黒字)、証券投資(7月:6842億円の黒字→8月:7590億円の黒字)ともに黒字幅が拡大したことで、

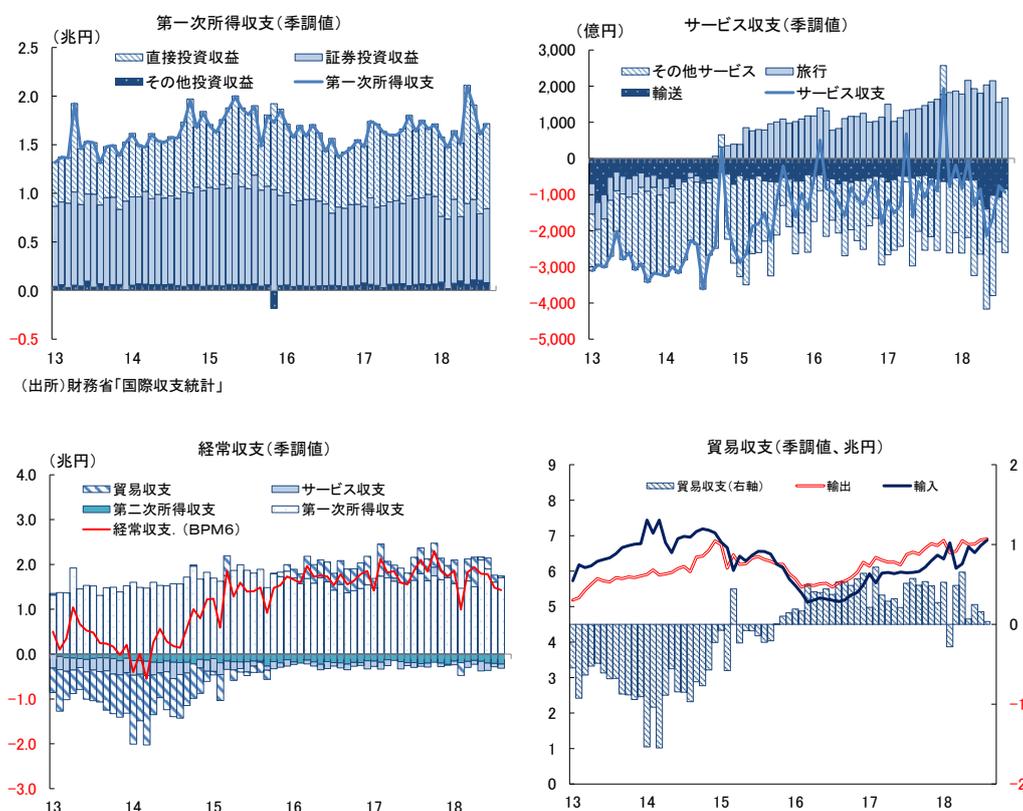
第一次所得収支は前月比プラスとなった。日本企業が海外企業に対して積極的なM&Aを行っていることなどを背景に、直接投資収益は増加基調で推移しており、経常収支拡大の牽引役となっている。一方、証券投資については、受取額に比べ支払額が顕著に増加しており、年明け以降水準を切り下げで推移している。

サービス収支は、▲933億円と前月から赤字幅が小幅に拡大した。内訳をみると、旅行収支（7月：1,553億円黒字→8月1,672億円黒字）は黒字幅を拡大させたが、相次ぐ自然災害などを背景に足元の訪日外客数の伸びは鈍化している。目先についても北海道胆振東部地震や台風21号といった自然災害による悪影響が訪日外客数に出るとみられ、旅行収支の黒字幅が縮小する可能性は大きい。一方で、その他サービス収支（7月：1,074億円の赤字→8月：844億円の赤字）の赤字幅が拡大したことで、サービス収支についても前月から赤字幅を拡大させる結果となった。

○所得収支が経常収支を下支えする見込み

以上のように、8月の経常収支（季節調整値）は、貿易収支の悪化を受けて黒字幅を縮小させる結果となった。

経常収支の先行きをみると、世界経済の拡大基調が続く中で、輸出についても緩やかながら増加基調で推移するとみられるが、原油価格が上昇基調にあることや内需拡大を背景に輸入金額は今後も増加するとみられ、貿易収支が引き続き経常収支の足を引っ張る形となろう。一方、所得収支については、世界経済の緩やかな改善や円安方向で推移する為替、海外企業に対するM&Aの拡大などを背景に、直接投資を牽引役に引き続き高水準を維持することが見込まれる。総じて見れば、経常収支は、所得収支の堅調さが押し上げに寄与することで、高水準で一進一退の動きを続けるとみられる。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。